

「日本人は悪くないんだよ。墨子ぼくしを読みなさい」

朝、目覚めると八時半だった。隣を見ると夫は例のごとくに口を開けたまま、すやすやと眠っている。

「かったるいなあー」とため息が出るが、自分を奮い立たせるように服を着替えて、「今日も一日戦いだぞ!」と階下に下りた。

冷や飯をレンジで温めて卵をかけ、醤油しょうゆをたらして口にかき込む。熱い煎茶をゆっくりと啜すする。さ、そろそろ開始しようか、と洗濯機をまわしたり、昨夜散らかしたものを片づけてから、二階に上がった。

夫の顔を入り口から見ると、まだぐっすりと眠っているようである。どうやらもう一息つけそうだとベッドの端に座った途端、階下で「こんにちは」という声がして娘が階段を上ってきた。

娘は、「まだ寝てるの?」と言って、私がおしめを替えようとする、「私がします」と

言ってくれた。正直助かる。ありがたい。私は実母を介護していたが、その時から今まで四十年以上、週一で働いてくれていたお手伝いさんも、いま重病で入院しているのである。

おしめを替えていた娘が、「あら、息をしてないみたい! お腹なかは温かいのに」と言った。
「えっ」

二人とも飛び上がりそうになるほど動転した。

「早く電話してっ! 一一九番」

娘が怒鳴っている。私はおろおろしながら、なんとか一一九番に電話をかけた。娘は夫に跨またがって、必死で人工呼吸をしている。

私は受話器に向かって、言葉を発した。

「息が止まってしまいました」

「蘇生そせいさせたいですか?」

「当然です」

大声で答えると、ものの三分くらいで三人の救急隊員さんが人工呼吸器を持って現れ、すぐさま一人の人がベッドに駆け上がり機械を使って全身の力を込めてマッサージしてくれている。

三人が交代しながら、かなり長時間やってくれたが、そして下半身はまだ温かいのに、

呼吸は戻らなかった。

「ご愁傷さまでした」

救急隊員に頭を下げられた。

「ありがとうございます」

私たち二人も深々と頭を下げた。

救急隊員が去ったあと、娘と二人でしっかりと抱き合って大声で泣いた。妙な表現になるが、何かドデカイことを成しとげた直後のような興奮に、二人とも包まれているようであった。そうなるもまだ私自身は夫が死んだと実感できずにいた。

五日前まで夫は歩いてトイレに行き、用を足していたというのに……。もちろん私が彼の後に立って両手で腰の後ろを押すように支えてはいるのだけれど。

暮れの二十九日ごろから急に夫の体から力がなくなっていた。正月に入っても一週間ぐらいいは頑張っていたのに、とうとう立てなくなってしまった。食欲も落ち、あつと言う間に痩せ細った。

そもそもは、令和元年（二〇一九）八月にさかのぼるが、夫は大腿骨を骨折したのである。大酒飲みだが二日酔いはほとんどしたことがない。それが自慢であったのに、酔って転んで、骨折したのだ。

救急車で病院に搬送された夫は、最初の手術がうまくいかなかったにもかかわらず、つまり骨がつかなかったのに、しばらくするとリハビリ病院に転院することになった。

リハビリ病院では、夫が「痛い」と何度も訴えていたのに、執刀医に診せるわけでも、レントゲンを撮るでもなく、ただただリハビリを続けさせられた。そして、まったくよくなるのに、二十五日ぐらい入院して、退院させられた。

退院してから執刀医に診察を請い、再手術をし、ようやく立てるようになり、歩けるようになった。別のリハビリ病院でリハビリをしたが、そこでは妙な異物を飲み込んで、食道を傷つけて大下血するというハプニングがあった。

まったく夫の入院生活は病魔に憑かれ放しだったのである。やっと悪運から解き放たれて、無事に歩けるようになってから、夫は吾が家に戻ってきた。

十カ月ほどの入院は彼を徹底的な病院嫌いにさせた。それでも去年の晩春に退院してから一カ月くらいは、リハビリの先生に通ってもらって、リハビリに励んでいた。そのころにはゲラを読んだりもしていて、つかの間のいい時間ではあった。

が、肝腎かんじんの六月は雨降りばかりで外歩きの練習ができなかった。自宅の階段を上ったり下りたりしなさい、と命じたが、先生がいないとかなかなかしない。筋肉が育たないとすべての負担が心臓にかかってくる。

それで年末になって心臓が悲鳴をあげて、急激に病状が悪化したのではないだろうか。

夫は自分の死が近いことを予期していたと思う。

「コロナの時代に一つだけいいことがあるとすれば、派手な葬式を誰もやらなくなったことです。どうか私が死んだときも、大げさなことは一切しないでください」

と何度も繰り返して言っていた。

彼は夫としては優等生であった。あんなに私を大切にして愛してくれた人はいない。

ほんの四日間だけ、下の世話を私にさせたことを、「もったいない」と嗚咽おえんを堪えながら、

「あなたにこんなことをさせるなんて思ってもみませんでした。申し訳ありません。あなたより先に逝ってしまうことも、本当に済みません」と頻りに詫びるのであった。

亡くなる日の真夜中、明け方だったかもしれない。

「起きてる？」

珍しくも主人の方から声をかけてきた。

「えっ」と飛び起きて、私は夫の枕元にしゃがんだ。

「なに？」

「日本人ってみんなが悪いと思ってるだろうか？」

「うん、私も悪い奴だと思ってるわ」

私がそう答えると、

「日本人は悪くないんだよ」

と言う。そして、

「墨子を読みなさい。二千五百年前の中国の思想家だけど、あの時代に戦争をしてはいけない、と言ってるんだよ。偉いだろう」

そう言って、また静かに眠りについた。

これは私への遺言であったのか。それとも私を通して少しでも多くの人に伝えたかったのだろうか。

良識ある日本人に、戦争の恐ろしさを語り続けた彼のベッドサイドテーブルの上には、今でも『墨子よみがえる』（平凡社新書）という自著が置かれている。